

# 英語教材分析

## －会話教材におけるコミュニケーション方略を中心にして－

平野 絹枝\*・鈴木 武秀\*\*

### 1. はじめに

近年の英語教育は、平成10年（中学校告示）及び平成11年（高等学校告示）の学習指導要領に示された「実践的コミュニケーション能力の育成」に主眼が置かれている。しかし、一方コミュニケーション重視の指導から、学習者の文法力の低下が叫ばれるようになった。その反省から「流暢さ」に加え、「正確さ」及び「複雑さ」を向上させることの必要性にも目が向けられるようになった。Ellis (2004) は、task-basedの研究における「流暢さ」、「正確さ」及び「複雑さ」の測定指標を挙げている。その中のaccuracyの指標には、Target-like use of verb tenses, articles, vocabulary, pluralsなどがあり、target-like useという言葉を使用している。このように、我々日本人のEFL学習環境における発話は、あくまで“target-like”であり、“target”にはなりえないように思える。従って、Canale (1983) が提唱するコミュニケーション能力のうち“Strategic Competence”を向上させ、意図した意味内容を何とかして対話者に積極的に伝達するように努力する能力を育成することによって「errorとうまく付き合う」という考え方が、より建設的なのではないだろうか。第2言語 (L2) によるコミュニケーションでは語彙や文法構造の知識などが不足して意思伝達に困難を感じるがよく起こるので、L2学習者はコミュニケーションに関する様々な問題と折り合っていく方法を指導されることで利益を享受することになる (Dörnyei, 1995)。

さらに、Bachman (1990) は、個人のもつ百科事典的な知識と言語能力を統括し、最後の決定を下す実行機能として方略的能力 (strategic competence) を位置付けている。つまり、学習者がそのときもっている知識をできる限り利用し、意味の交渉 (negotiation of meaning) を行い、コミュニケーションの目的を達成しようとするのが方略的能力である。コミュニケーション方略 (communication strategy) (CS) を指導することは、学習者の「積極的にコミュニケーションを行う態度」の育成につながるのではないだろうか (平野, 1992; 高橋, 2002)。

そこで本稿では、英語指導の主たる情報源である教科書でどのようにCSが扱われているかを調べ、分析する。先行研究の一例として、Iwai (2001) がある。Iwaiは日本の中学校で使用されている検定教科書でCSがどのように扱われているかという視点で7社21冊の教科書を分析している。その結果、CS理論を取り入れ、積極的に指導に取り入れようとする傾向は本文だけでなく練習問題の中でもほとんど見られなかったことを報告している。本稿ではその結果を受け、昨今ますますその需要を増している英会話スクールで使用されているテキストに焦点を絞り、CSがどの程度会話の中に盛り込んで編纂されているかを分析する。また、Iwai (2001) の結果と本稿の結果を比較し、日本の中学校で使用されている検定教科書と英会話スクールで使用されているテキストでのCSの使用頻度がどのように違うか、あるいは同じ傾向を示すか、について検証する。

### 2. 英語教材におけるCSの扱われ方

#### 2.1 学習指導要領の変遷に関わるCSの扱い方

平成10年（中学校）、平成11年（高等学校）に告示され、（内容に関して2003年に一部改訂）それぞれ翌年から学年進行で実施され、平成14年4月1日に完全実施となった。かくして中学校（外国語）の目標は、外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う、となり、高等学校（外国語）では、日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる、という「実践的コミュニケーション能力」「積極的にコミュニケー

\* 上越教育大学 \*\* 上越教育大学院生

ションを図ろうとする態度」の育成に主眼がおかれた目標を達成するための指針が打ち出されたわけである。中学校においては、「イ 話すこと」の内容に「(エ) つなぎ言葉を用いるなどいろいろな工夫をして話が続くように話すこと」が盛り込まれ、高等学校においては「第1 オーラルコミュニケーション I 2 内容 (2) 言語活動の取り扱い」にて、「(ウ) 繰り返しを求めたり、言い換えたりするときなどに必要となる表現を活用すること、(エ) ジェスチャーなどの非言語的手段の役割を理解し、場面や目的に応じて効果的に用いること」という文言が盛り込まれている。これは明らかにCSの一部を組み込んだ部分であるといえる。

一方で、ゆとり教育が提唱され、授業時数が削減されることとなった。その後も関心・意欲・態度を重視する考えから外国語教育に費やされる時間は、学習指導要領に示された目標の壮大さとは裏腹に縮小の一途をたどっている。結果として、教科書で扱う内容にCSの理論的背景を持つ表現やスキルを明示的に指導するセクションを設けることが困難になるのは、言わば当然であろう。

## 2.2 日英教科書における全体的な傾向

日本の英語教科書では、Tatsukawa (2000)、Iwai (2001) が示すように、CSについて積極的に言及しているとはいえない。さらに、英米の出版社が出版している教科書にもCSの理論的な背景を盛り込んだセクションはほとんど設けられていない (Faucette, 2001; Iwai & Konishi, 2003)、という報告がある。そこには次のような理由が考えられる。CSの定義や分類に関しては、これまで多くの研究者が試行錯誤を続け、Dörnyei & Scott (1997) によって一応の着落を見たようにも思える。しかし、いまだ研究者によって捉え方が異なり、同じような機能を持っていても異なるネーミングや範疇を有している。その結果、教科書中では体系的なCS指導を避け、会話の中に暗に盛り込まれているに過ぎず、その指導の在り方についてはまったく教師側に委ねられているとも言える。

## 2.3 Iwai (2001) の中学校英語科検定教科書分析結果

Iwai (2001) は、CSの指導可能性、またその指導方法が明らかにされていないこと、学習者が自身の目標言語知識の欠如を補う能力の解明がいまだなされていない点を指摘している。また、指導可能性の是非を論ずる前に考えなければならない問題として、以下の3点を挙げている (p.33)。

1. 研究の方法論に関して (トレーニング期間の短さ、トレーニングの対象が語彙的な方略に限定されている、データがトレーニング直後にとられ、学習者の意識が方略的問題解決に向けられた状態であること)。
2. 学習者の言語能力 (形式に関して) の発達に対するCSトレーニングの貢献度が吟味されていない。
3. 教科書を含む指導資料や、学習環境からどれだけ方略的能力を獲得するか吟味されていない。

Iwai は以上3点のうち3番目の問題に焦点を当て、7社21冊 (1, 2, 3学年) の中学校英語科検定教科書を本文とExerciseにおけるCS使用頻度に関して分析している。分類の枠組みはDörnyei & Scott (1997) を使用しており、分類に関しては、以下の14種のCSのタイプを分析している (表1)。分析結果については、以下の表2に示した (各教科書が3学年すべて (3冊) を含んでいたため、表中Average/3の項目は、1冊あたりの平均出現回数を示している)。

表1 IwaiのCSの分類 (Iwai, 2001, p.34)

LEXICAL CS	REPAIRING CS	INTERACTIONAL CS	INDIRECT CS
Circumlocution (CI)	Self-rephrasing (RP)	Appeal for help (AH)	Use of fillers (F)
Approximation (AX)	Self-repair (SR)	Comprehension check (CC)	
Word-coinage (WC)	Other-repair (OR)	Asking for repetition (AR)	
Literal translation (LT)		Asking for clarification (CL)	
		Asking for confirmation (Con)	
		Expressing nonunderstanding (NU)	

Iwaiの分析結果は次の通りである。すなわち、どの教科書においても表現に偏りがあり、14種類の方略タイプのうち、8種類に関して各1冊において平均1回を下回っている。語彙的方略ではliteral translationの使用頻度が高く、英語辞書に掲載されている日本語を除いても1冊につき平均で1.7回の出現頻度である (表中のLT\*は、英語辞書に

掲載されている日本語 (e.g., chankonabe) を除いた数値である)。さらに, circumlocutionやapproximationはほとんど見られなかった。相互作用方略 (interactional CS) についてもその頻度の少なさを報告している。例えば, asking for clarification (CL) (=clarification request) は1冊につき平均でたった1.6回, confirmation checks (Con) は1.3回であった。さらに, asking for repetitionやappeal for helpはほとんど出現していなかった。rephrasing strategiesに関しては, self-rephrasingの例がかなり多く21冊中計23回) 見られた。最も使用頻度が高かった, fillersに注目し, その下位分類を示してさらに詳細に分析している。

表2 Summary of CS (Iwai, 2001, p.34)

CS Textbook	Lexical					Repair			Interactive					Indirect F
	CI	AX	WC	LT	LT*	RP	SR	OR	AH	CC	AR	CL	Con	
A	1	0	0	0	0	4	1	0	0	0	0	8	5	22
B	1	1	0	1	1	2	0	0	0	1	0	6	9	11
C	2	1	0	18	10	6	0	0	0	0	1	6	4	14
D	0	0	0	2	2	1	0	0	0	0	1	4	3	22
E	1	1	0	9	6	8	0	0	0	0	2	5	1	5
F	2	0	0	15	13	2	0	0	0	0	0	1	4	12
G	0	0	0	6	4	0	0	0	0	0	0	4	1	8
Total	7	3	0	51	36	23	1	0	0	0	4	34	27	94
Average	1.0	0.4	0.0	7.3	5.1	3.3	0.1	0.0	0.0	0.1	0.6	4.9	3.9	13.4
Average/3	0.3	0.1	0.0	2.4	1.7	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	1.6	1.3	4.5

N.B.: NU's are included in CL.

fillersの中で最も頻度が高かったのは, “well” で全体のおよそ76%であった。教科書1冊あたりの使用頻度は, 平均で4.3回であった。また, 興味深いことに, 文中で出現する位置に注目し, 次の点を報告している。まず, ほとんどのfillersは, 文の最初の部分に位置しており (93%), そのうちの70%が対話者の発話のすぐ後に, しかも発話のはじめで使用されている, と述べている。このことから, fillersの教科書における提示に関して次のような不備を指摘している。すなわち, fillersは, 発話者が発話内容を構築したり, コミュニケーションの問題を切り抜けようとする際に, 発話の始め以外で使用されることが多いので, 学習者がfillersのtime-gainingとしての機能を習得するには適切な提示方法だとは言いがたい, ということである。

### 3. 英会話教材分析の方法

#### 3.1 教材分析の目的

(1) CSの指導可能性に関しては, 異論を唱える研究者もあるが, これまで様々な研究者によって肯定されてきた (Bialystok, 1990; Dörnyei, 1995; Dörnyei & Thurrell, 1991; Færch & Kasper 1983; 平野, 1992; Konishi & Tarone, 2004; Rost & Ross, 1991; Russell & Lester, 1998; Tarone, 1984; Yule & Tarone, 1997; Willems, 1987)。また, 指導の際に使用するタスクも様々なものが開発されている (平野, 1992; Takatsuka 1996; Tarone & Yule, 1989; Yule, 1997)。さらに, 平野 (1987) は, Ellis (1984) のCSを取り入れたコミュニケーションの評価項目を提示し, 評価材料とするテストは, 教師が生徒の発話したい内容を容易に推測できるようなタスクを行った際のテストのほうが望ましく, そのほうが評価に集中できる, という点について言及している。また, その際の評価項目についても「あまり分析的になりすぎないように」(p.195) 留意する必要があることを主張している。このように, 授業中に実践可能なタスクが開発され, しかもその評価項目まで提案されているにもかかわらず, 言語指導の基本的なソースである英語の教科書や指導資料には, 明示的にCSの概念を取り入れ, 構成されているものは数少ないのが現状である (Faucette, 2001; Iwai, 2001; Iwai & Konishi, 2003; Tatsukawa, 2000)。学習者の英語によるインタラクションを円滑にし, 流暢さを助長する働きがあるCSのachievement strategiesが, 一般向けの英会話スクールで使用されているテキストにおいてどの程度扱われているかを調査し, 分析することで, より自然な文脈でのCS使用の効果的な指導に関して示唆を得たいと考える。

分析対象の教科書に, 英会話スクールのテキストを採用した理由の一つに, 英会話スクールが公教育での外国語としての英語学習 (EFL) 環境とは異なる点がある, ということが挙げられる。少人数制により常にネイティブ・ス

ピーカー（NS）との会話を行う機会が設けられており、すべての授業がNS講師陣主導による100%英語による学習環境が保障されている。言わば、日本において最も第2言語としての英語（ESL）学習環境に近い形で指導が行われていると言えよう。そういった指導環境で採用されているテキストのほとんどは一般的には英会話スクール独自で編纂されている。また、テキスト中の会話場面の設定は、海外における生活場面での会話が中心である。本稿で採用したSchool A（NOVA）のテキストに関して言えば、ほとんどがNS同士の比較的長い会話である。School B（AEON）の教科書は逆に日本人学習者の会話能力を高めることが念頭に置かれて編纂されていることが巻頭の“To the Student”に明言されている。そのため会話の設定は、そのほとんどがNSと日本人留学生との会話場面である（一部設定上NS同士の会話場面を含むが）。以上のような特徴を持つ英会話スクール教材における、会話中に盛り込まれているCS使用例とその使用頻度を調べることによって英語教材開発の示唆を得ることができよう。また、教育現場で英語教師がCS指導を通して、現行の教科書に加え、自然な文脈でのCS使用の例を資料として生徒に提示し、より円滑なコミュニケーション活動を授業に組み込むことによって、より豊かな表現力を生徒に身につけさせることができるものと考えられる。

（2）Iwai（2001）が分析した、中学校の英語科検定教科書と英会話スクールで使用されているテキストに出現するCSの頻度を比較し、教材開発に関する示唆を得たいと考える。

### 3.2 分析教材

日本の大手英会話スクール2社（A, B）が採用しているテキスト6種類（各3種類ずつ）を分析する。

#### a) School A（NOVA）の使用教材

- （1）QUEST Access HARTLEY & VINEY. New York: Oxford University Press. (以下QA…初級用)
- （2）QUEST Build HARTLEY & VINEY. New York: Oxford University Press. (以下QB…中級用)
- （3）QUEST Complete HARTLEY & VINEY. New York: Oxford University Press. (以下QC…上級用)

#### b) School B（AEON）の使用教材

- （4）CHECKPOINT. Roundup Lesson. Tokyo: AEON Institute of Language Education. (以下CP…初級用)
- （5）Viewpoint. Roundup Lesson. Tokyo: AEON Institute of Language Education. (以下VP…中級用)
- （6）Focus Point. Roundup Lesson. Tokyo: AEON Institute of Language Education. (以下FP…上級用)

### 3.3 CSの分類

CSの分類に関しても様々な研究者によって異なった分類がなされている。しかし、概ね合意を得ている点として以下の種類が挙げられる。

大きく分けて「意図したメッセージの一部または全部を伝達しようとするのを回避する」回避方略（avoidance strategies）と「なんとかして意図したメッセージを伝達しようとする」達成方略（achievement strategies）に分けられる（Færch & Kasper, 1983; Willems, 1987参照）。avoidance strategiesの下位項目には、メッセージを途中で破棄するmessage abandonmentとトピックそのものを回避するtopic avoidanceがある。achievement strategiesには、言語方略（verbal strategies）と非言語方略（non-verbal strategies）に分けられる。さらに、言語方略は母語に依存するL1-based strategiesと目標言語に基づくL2-based strategiesが含まれる。

本稿では、2.1で述べたとおり、日本の英語教育が掲げる大きな目標としての「実践的コミュニケーション能力の育成」ということを念頭に置き、教科書に扱われているachievement strategiesの分析を行う（avoidance strategiesは分析の対象としない）。Tarone（1977）、Bialystok（1983）、Færch & Kasper（1983）、Dörnyei（1995）、Iwai（2001）を参考にして、以下の11種類のCSのタイプを設定して分析を行った（表3）。

表3 CSの分類

Communication Strategies			
ACHIEVEMENT			
L1-BASED	L2-BASED		
	PARAPHRASE	INTERACTIONAL	TIME-GAINING
Code-switching	Word coinage	Confirmation check	Fillers
Literal translation	Circumlocution	Clarification request	
	Approximation	Comprehension check	
	Restructuring		
	Exemplification		

### 3.4 分析の方法

(1) 表3で示した分類にしたがって、各テキストに出現するCSを分析し、その出現頻度を全体、及びスクール別に調べた。また、(2) Iwai (2001) の中学校の検定教科書におけるCS出現頻度と比較する。その際、Iwai (2001) が使用している分類に含まれるCSと本研究が分析しているCSのタイプが若干異なるので、両研究において共通に分析対象としている8種類 (Literal translation, Word coinage, Circumlocution, Approximation, Confirmation check, Clarification request, Comprehension check, 及びFillers) について比較した。CS出現頻度の比較では、小度数のもの (Word coinage, Approximation, Comprehension check) を除外して、 $2 \times 5$  の $\chi^2$ 検定を行った。

## 4. 結果と考察

### 4.1 分析対象テキスト全体 (全6冊) のCSの使用頻度

もっとも出現頻度が高かったCSは、FillersでCS使用総数の66% (903/1,376)、ついでConfirmation check, Circumlocution, Clarification request, となっている。(表4参照)。また、Literal translation及びWord coinageは、どのテキストにも出現しなかった。全体的にみて、分析対象とした11種類のCSは、平均的に出現しているとは言えず、かなりの偏りが見られた。これには次のような要因が考えられる。まず、School Aのテキストは、ほとんどの会話が海外におけるNS同士の会話場面であり、School Bのテキストは日本人とNSとの会話であるが、場面は留学先の海外での会話という設定であるため、Word coinageや、話者のL1に関する知識が対話者に存在することが伝達機能の前提となるLiteral translationが出現しなかったものと思われる。また、Fillersの出現頻度が高かったことは、会話を断絶させることを回避し、会話を円滑にし、話者が発話内容を構築する手段としてのtime-gainingの機能がNS, NNSにかかわらず十分果たされることを示していると思われる。

第2に、初級、中級、上級レベルそれぞれにおけるCSの出現頻度の違いから、レベルが上がるにしたがってテキストでCSを扱う頻度が減少していることに注目したい。両スクールのテキストの傾向として、レベルが上がるにしたがって、会話場面の掲載が極端に減り、代わって、話題提供となる新聞記事や海外の文化の紹介や雑誌記事にあるような説明文を掲載するように構成されている、と言えよう。上級レベルでは、モデルの会話をもとに練習する形式ではなく、話題にしたがって生徒の自発的な発話を促すディスカッション形式の授業が中心的に行われていると考えられる。また、本稿の分析は、テキストの会話部分に焦点を当てているため、極端に上級レベルのテキストのCS出現頻度が著しく減少していることは容易に予想がつく。それにもかかわらず、Fillersはレベルがあがっても各テキスト中の出現頻度の割合を維持し続けていることは注目に値するであろう。

最後に、①L1-based strategies, さらにParaphrase (出現しなかったWord coinageを除く) と②Interactional strategiesを比較すると、Interactional strategiesのほうが極めて多く出現しており、①と②の差は100回以上である。これは、英会話スクールの特徴を浮き彫りにしており、よりオーセンティックな教材が使用されているということができる。つまり、対話者間の相互作用による問題解決の手法が育成される可能性が高いといえる。また、中でもConfirmation checkの頻度が高く (ほとんどが相手の発話に含まれる語彙が理解できず、あるいはよく聞き取れず、その単語をrising intonationで質問するものであった (資料参照)), 積極的に情報を得ようとする姿勢を促進する可能性があり、やはりオーセンティックなテキストの特徴を浮き彫りにしている。Paraphraseの中で最も使用頻度が高かったのは、circumlocutionであった。この方略の使用によって、自ら意図した意味内容を積極的に伝えようとする意識を高めることができるであろう。またその性質上、“wordy”になりがちであり、加えて、様々な文法事項 (関

係詞節やif節, when節などを含む)を駆使することとなり, 文法能力の向上を促す可能性を秘めている (Konishi, 1995; Konishi & Tarone, 2004; Takatsuka, 1996; 高塚, 1997) と考える。

表4 英会話スクールの各テキストで扱われているCSの出現頻度

CS/Book	School A					School B					合計	平均 (小計/6)
	QA	QB	QC	小計	平均 (小計/3)	CP	FP	VP	小計	平均 (小計/3)		
Code-switching	0	0	0	0	0.00	5	12	4	21	7.00	21	3.50
Literal translation	0	0	0	0	0.00	0	0	0	0	0.00	0	0.00
Word coinage	0	0	0	0	0.00	0	0	0	0	0.00	0	0.00
Circumlocution	49	44	15	108	36.00	0	1	3	4	1.33	112	18.67
Approximation	5	3	1	9	3.00	0	2	0	2	0.67	11	1.83
Restructuring	0	14	13	27	9.00	0	0	0	0	0.00	27	4.50
Exemplification	3	5	0	8	2.67	0	0	1	1	0.33	9	1.50
Confirmation check	55	30	38	123	41.00	18	1	8	27	9.00	150	25.00
Clarification request	40	39	20	99	33.00	1	5	4	10	3.33	109	18.17
Comprehension check	1	5	1	7	2.33	0	0	0	0	0.00	7	1.17
Fillers	283	290	160	733	224.33	58	66	46	170	56.67	903	150.50
Total	436	430	248	1,114	371.33	82	87	66	235	78.33	1,376	229.33

## 4.2 School AとSchool Bのテキストの比較 (表4 参照)

### 4.2.1 School A (NOVA) のテキスト

School Aのテキストは, 全体として4.1節で示した6冊すべての傾向と同様の出現頻度であった。しかし, Code-switching, Literal translationに関しても皆無であったことから, 完全にL1-based strategiesの出現が確認されなかったわけである。理由として考えられることは, 4.1節で挙げたように, オーセンティックな言語使用を目的としたテキストであるため, NS-NSの会話場面がほとんどを占めていることが主要な要因であると考えられる。対話者間にL1の違いがないため, 上記のようにL1の知識を活用して会話の問題解決を行うCSが見られないということは当然であろう。また, そうすることで, 学習者自身が自己のL1に頼ることを排除し, 積極的に目標言語で問題解決をすることができる, と言うこともできる。

6冊に共通して見られたFillersの出現傾向はSchool A (3冊)に限っても同様に見られた傾向であるが, 注目すべき点は, QA (初級)からQB (中級)にテキストが移るに従って, 3冊全体におけるCS出現頻度は, 多少減少しているわけだが, その中で, Fillersに関しては, 増加している点である。ここでは, さらに多くのFillersを使用することで, より多くの発話を促しているのではないだろうか。

さらに, Restructuringの出現頻度は, QA (初級用テキスト)においては0回であったが, QB (中級用テキスト)では14回, QC (上級用テキスト)では13回と頻度が増えている。全体的な頻度が下がっている中で, 増加傾向を示していることは特筆すべきである。おそらく, 言語資源が少ない学習者には, Interactional strategiesやTime-gaining strategiesを使い, 他者からの支援を得てコミュニケーションを達成できるように配慮されていると考えられる。また, 他者から更に情報が要求され, Circumlocutionで言い換えを行うことによって会話の問題解決を行い, 持っているあらゆる言語資源を活用するようにトレーニングしていると考えられる。中級に移行するにあたって, 自らの統語的な知識の欠如に気付き, 他の利用可能な言語資源にアクセスし, 表現を再構成するRestructuringの使用が促されている。それにより, 統語的に正確な構造を持った言語を産出する練習が提供されると言えよう。

### 4.2.2 School B (AEON) のテキスト

School Aと同様, 全体的にParaphraseに含まれるCSの出現頻度が少なく, Fillers及びInteractional strategiesの使用に偏っているといえる。またSchool Bのテキストに関する大きな特徴としては, L1 based strategiesの一つであるCode-switching (3冊で計21回)が出現していることが挙げられる。このような傾向を示した理由として, School Bのテキストが日本人向けに構成されており, 場面設定がNSと日本人留学生の会話であることが主要な要因であると

考えられる。FillersとInteractional strategiesに関して出現頻度が高い理由は、4.2.1節でSchool Aについて述べた通り、Interactional strategiesやTime-gaining strategiesを駆使し、対話者からの支援を受けてコミュニケーションの断絶を防ぎ、意図した目的を達成する方法を活性化することがその要因であると考えられる。また、Code-switchingが出現している理由は、日本人の文化に関する会話が盛り込まれており、英語の語彙に含まれないもの (e.g., *osechi*) について説明する必要性から生じたものと思われる。

さらに、School Aで最も一般的であったFillersがSchool Bでは、School Aのテキストより出現回数は少ないが、他の種類のCSに比べて最も多かった。このことからFillersのtime-gaining strategiesという機能を十分に生かすことで話者の発話を継続することの重要性がうかがえる。

さらに、School Aにはなく、School Bのテキストのみに言えることは、School Bのテキストの各レッスンで、“Conversation Strategies (CP)”, “Communication strategies (VP, FP)” というコラムが設けられており、「同意や同情の表し方」、「話しかけたいとき」に加え、「相手が言ったことの確認を取りたいとき」など本稿が焦点を当てているCSのタイプも指導の一環に加えられていることである。これらは、必ずしも話者の言語資源不足でコミュニケーション上の困難に陥った時に用いられる方略に留まらず、ビジネスやその他のあらゆるコミュニケーション場面を円滑にするための、言わば広義のCSが紹介されている。そこではCSを系統的に指導するためのタスクや様々なコミュニケーション活動が積極的に紹介されているわけではないが、しかし、そこに含まれる情報を基にした活動を教師が任意で提供することが可能である。

#### 4.3 Iwai (2001) の分析結果との比較

表5は、テキストにおけるCSの出現頻度(素数と%)を示している。小度数のWord coinage, Approximation, Comprehension checkを除外して、2(日本の検定教科書と英会話スクールのテキスト)×5(CSのタイプ)の $\chi^2$ 検定を行った結果、CSの出現回数の偏りは有意であった( $\chi^2(4)=341.96, p<.01$ )。表6の残差分析結果から、Literal translationとClarification requestに関しては、中学校の教科書において多く出現した。逆に、Circumlocution及びFillersに関しては、英会話スクールテキストに多く出現していることが分かった。このことから、英会話スクールテキスト中の対話部分に出現するCSには、日本の中学校英語科検定教科書に比べて話者のL1に依存するものが明らかに少ないと言える。逆に、コミュニケーションの困難(意図した意味内容を伝達するために必要な語彙がない、思い出せないなど)に直面した際、意図した意味内容を変えないで別の表現を構築し言い換えたり、“Well....”や“Let’s see....”など多種多様な表現で時間を稼ぐなど、あくまで目標言語(英語)をもとにした方略でその困難を切り抜ける例が、日本の中学校検定教科書に比較すると多く提示されているといえよう。一方、Clarification requestについては、日本の教科書は、CS全体の総出現数(217回)中16%を占め、英会話スクールテキスト(8%)より割合が多いことから、日本の教科書のほうが、対話者の発話の意図が正確に伝達されなかった場合などに、明瞭化の要求や説明を求めることで積極的にインプットを得ようとする態度の育成、ひいては、「実践的コミュニケーション能力の育成」に配慮していると言えるかもしれないが、日本の中学校の検定教科書では、各一冊に平均出現回数が1.62回(21冊中34回)と少なく(Iwai, 2001, p.35), clarification requestが十分に出現しているとはいえなかった。

表5 中学校英語科検定教科書(Iwai, 2001)と英会話スクールテキスト(本研究)のCSの出現頻度の比較

CSのタイプ	中学校教科書 (Iwai, 2001)		英会話テキスト (本研究)	
	21冊中の 総出現回数	(%)	6冊中の 総出現回数	(%)
LT	51	24%	0	0%
WC	0	0%	0	0%
CL	7	3%	112	9%
AP	3	1%	11	1%
CC	27	12%	150	12%
CR	34	16%	109	8%
Com	1	0%	7	1%
FL	94	43%	903	70%
Total	217	100%	1,292	100%

Notes : Literal translation (LT); Word coinage (WC); Circumlocution (CL); Approximation (AP); Confirmation check (CC); Clarification request (CR); Comprehension check (Com); Fillers (FL).

表6 表5の各セルの期待度数と調整された残差

	中学校教科書 (Iwai, 2001)			英会話テキスト (本研究)		
	実際度数	期待度数	残 差	実際度数	期待度数	残 差
LT	51	7.3	17.77**	0	43.7	-17.77**
CL	7	17.0	-2.74**	112	102.0	2.74**
CC	27	25.4	0.38	150	151.6	-0.38
CR	34	20.5	3.39**	109	122.5	-3.39**
FL	94	142.8	-7.69**	903	854.2	7.69**

\*\* $p < .01$ 

## 5. 結論

本研究では、次の点が明らかになった。(1) 英会話スクールのテキストには、分析対象とした11種のCSの出現頻度にはかなり偏りがあること、中でもFillersがその6割以上を占めた。(2) テキストのレベルが上がるにつれ、CS全体の出現頻度が下がった。(3) L1 中心の方略よりもL2中心の方略 (Circumlocution) やインタラクションに基づく方略 (Confirmation check, Clarification request) の出現頻度が高かった。(4) Iwai (2001) が実施した中学校の検定教科書の分析結果との比較では、Fillersの出現回数は、英会話スクールのテキストにおいて極めて多かったが、Literal translationに関しては、日本の検定教科書のみに見られた。また、Clarification requestの頻度数は十分であるとは決して言えなかったが、テキスト比較においては、日本の中学校の検定教科書のほうが、少し多かった。逆にCircumlocutionは、日本の検定教科書より英会話テキストに若干多く出現していることが明らかになった。

発話者が発話を構成するための時間を稼ぐことができるFillersは、英会話スクールのテキストにおいて、文頭のみならず、文中にも頻繁に出現していたことから、日本の中学校検定教科書では出現位置 (文頭だけでなく (Iwai, 2001)) に配慮したり、さらに多くの「Filler表現」を導入するなど、現行の教科書において何らかの改善が図られる必要があるのではないだろうか。あるいは、インタラクションに基づくClarification requestなどの英文例を教師が適宜用意したり、Circumlocutionの指導を日々の授業に組み込み、referential tasks等を意識的に多用することによって、よりオーセンティックなCS指導の中で、生徒の文法能力を高めることが可能になるものと考えられる。

今後の課題として、次の点が挙げられる。

- ① さらに多くの英会話スクールのテキストをCSの観点から分析する。
- ② 日本の高等学校検定教科書や大学で使用されているテキストと英会話スクールテキストをCSの観点から比較する。
- ③ 本研究は、教科書の本文のみを比較しているので、ExerciseにおいてどのようにCSのトレーニングがなされているか、という視点で検定教科書と英会話スクールテキストを比較する。
- ④ 英会話スクールのテキストにおける、CSタイプと出現場面の関係を明らかにする。

## 参考文献

- Bachman, L. F. (1990). *Fundamental Considerations in Language Testing*. New York: Oxford University Press.
- Bialystok, E. (1983). Some factors in the selection and implementation of communication strategies. In C. Færch & G. Kasper (Eds.), *Strategies in interlanguage communication* (pp.20-60). Harlow, England: Longman.
- Bialystok, E. (1990). *Communication strategies: A psychological analysis of second-language use*. UK: Basil Blackwell.
- Canale, M., & Swain, M. (1980). Theoretical bases of Communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, 1, 1-47.
- Dörnyei, Z., & Thurrell, S. (1991). Strategic competence and how to teach it. *ELT Journal*, 45, 16-23.
- Dörnyei, Z. (1995). On the Teachability of Communication Strategies. *TESOL Quarterly*, 29, 55-85.
- Dörnyei, Z., & Scott, M. L. (1997). Communication Strategies in a Second Language: Definitions and Taxonomies. *Language Learning*, 47, 173-210.
- Ellis, R. (1984). Communication Strategies and the evaluation of communicative performance. *ELT* 38, 1, 39-44.
- Ellis, R. (2004). *Task-based Language Learning and Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Færch, C., & Kasper, G. (1983a). Plans and strategies in foreign language communication. In Færch, C. & Kasper, G.



- (Eds.), *Strategies in interlanguage communication* (pp.20-60). Harlow, England: Longman.
- Faucette, P. (2001). A pedagogical perspective on communication strategies: Benefits of training and an analysis of English language teaching materials. *Second Language Studies (University of Hawaii)*, 19, [Online] Available at: [http://www.hawaii.edu/slsuhwpsel/on-line\\_cat.html](http://www.hawaii.edu/slsuhwpsel/on-line_cat.html)
- Haastrup, K., & Phillipson, R. (1983). Achievement strategies in learner/native speaker interaction. In Færch, C., & Kasper, G. (Eds.), *Strategies in interlanguage communication* (pp.140-158). Harlow, England: Longman.
- 平野絹枝. (1987). 「教室内コミュニケーションの指導と評価ーコミュニケーション方略を中心にしてー」『中部地区英語教育学会研究紀要』, 16, 190-195.
- 平野絹枝. (1992). 「日本における英語教育の将来ー発信型英語教育を求めて: speakingにおけるコミュニケーション方略の指導と実践」『中部地区英語教育学会研究紀要』, 21, 265-270.
- Iwai, C. (2001). Analysis of junior high school English textbooks from the perspective of communicative competence. *Annual Review of English Language Education in Japan*. 13, 31-40.
- Iwai, C. & Konishi, K. (2003). Theoretical controversies and pedagogical values in teaching communication strategies. *CASELE Research Bulletin*, 33, 111-120.
- Kitajima, R. (1997). Influence of learning context on learners' use of communication strategies. *JALT Journal*, 19, 7-23.
- Konishi, K. (1995). Teaching compensatory strategies in the Japanese ESL classroom: A core vocabulary and its pre-/post-modificationーwith special reference to a strategic syllabus. *Studies in Language and Literature of Matsuyama University Research Association*, 15, 13-22.
- Konishi, K & Tarone, E. (2004). English constructions used in compensatory strategies: Baseline data for communicative EFL instruction. In Boxer, D. & Cohen, A. D. (eds.) *Studying Speaking to Inform Second Language Learning*, pp.174-198. UK: Multilingual Matters.
- Poullisse, N. (1987). Problems and solutions in the classification of compensatory strategies. *Second Language Research*, 3, 141-153.
- Rost, M., & Ross, S. (1991). Learner use of strategies in interaction: Typology and teachability. *Language Learning*, 41, 235-273.
- Russell, G., & Lester, L., (1998). The need to teach communication strategies in the foreign language classroom. *JALT Journal*, 20, 100-114.
- 高橋貞雄. (2002). 「コミュニケーション方略 (communication strategies)」青木昭六編著『新学習指導要領に基づく英語科教育法の構築と展開』 現代教育社
- Takatsuka, S. (1996). Teaching communication strategies: A lesson aimed at teaching postmodifying structures for paraphrase. *The Bulletin of Faculty of Education Okayama University*, 102, 165-184.
- 高塚成信. (1997). 「コミュニケーション方略ー文法的問題の回避と解決ー」『岡山大学教育学部研究集録』, 106, 119-131.
- Tarone, E. (1977). Conscious communication strategies in interlanguage: A progress report. In H. D. Brown, C. A. Yorio & R. C. Crymes (Eds.), *On TESOL'77* (pp.194-203). Washington: TESOL.
- Tarone, E. (1984). Teaching strategic competence in the foreign-language classroom. In Savignon, S. & M. Berns (eds.) *Initiatives in communicative language teaching*. (pp.127-136). Reading: Addison-Wesley.
- Tarone, E., & Yule, G. (1989). *Focus on the language learner*. Oxford: Oxford University Press.
- 達川奎三 (2000). 「コミュニケーション方略は教科書でどのように扱われているか」『中国地区英語教育学会研究紀要』, 30, 255-264.
- Willems, G. M. (1987). Communication strategies and their significance in foreign language teaching. *System*, 15, 351-364.
- Yule, G. (1997). *Referential communication tasks*. NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Yule, G., & Tarone, E. (1997). Investigating L2 reference: Pros and cons. In G. Kasper, & E. Kellerman (eds.) *Communication strategies: Psycholinguistic and Sociolinguistic perspectives*. (pp.17-30). England: Longman.

資料 具体的に使用されているCS表現の抜粋 (School A (NOVA) の場合)

スクール	テキスト	CS分類	例 文
School A (NOVA)	QA QB QC	Circumlocution	—About a marriage counselor— <i>A marriage counselor helps married couples to talk about their problems and to solve them.</i>
		Approximation	A: What are latrines? B: <i>Toilets.</i> I've never had to clean toilets.
		Restructuring	"I have studied English since....for five years in France." "Can I...I mean, could I...uh...may I have the...."
		Exemplification	"I like horror movies... <i>Frankenstein and Dracula.</i> ", "...the major appliances... <i>new stove, refrigerator, dishwasher, ....</i> "
		Confirmation check	A: Well, my daddy is athletic. B: <i>Athletic?</i>
		Confirmation request	"What?", "Pardon me?", "Excuse me?", "Sorry?", "Eh?", "Huh?", "What do you mean?",
		Comprehension check	"....., O.K.?", "You know what I mean?"
		Fillers	"Well...", "You know...", "Actually...", "I mean...", "Gee...", "You see...", "Let's say...", "Let me see...", "In my opinion..."